

日本陸軍航空史（その 11）

～日華事変(4)～

1 はじめに

本年もよろしくお願ひ申し上げます。昨年 11 月、12 月は、何かと多忙につき、連載を休ませていただきましたことをお許しください。新春も今頃になってようやく書きました第一弾は、主として昭和 15 年(1940 年)から昭和 16 年(1941 年)にかけて行われた、北部・南部仏印進駐に伴う航空部隊の運用などの御紹介です。

この連載内容から話がそれますが、『「坂の上の雲」に隠された歴史の真実』(福井雄三著・主婦の友社・平成 19 年 12 月発行)を読みました。私の郷里下関市の長府藩出身たる乃木希典大将と、私の知人の御先祖・薩摩藩出身の伊地知幸介参謀が馬鹿だったというのは、陸大の資料を主旨に反して脚色した、司馬遼太郎の創作であるということを知り、実に二十数年振りに、心が晴れました。

また、『乃木希典』(福田和也著・文春文庫・平成 19 年 8 月発行)を読み、巻末の参考文献の中で、『坂の上の雲』の歴史観が間違っているという本が数冊出版されていたことを知りました。

福井氏の著書では、「旅順要塞の攻略で 6 万人もの死傷者(戦死 1 万 5 千人、負傷者 4 万 5 千人)を出したが、第 1 次世界大戦では、フランスのベルダン要塞攻撃におけるドイツ軍の戦死者が 75 万人であり、近代的な要塞を攻略するには、乃木さんのような攻撃方法しかなかった」と述べられています。旅順要塞攻略作戦においては、もちろんさまざまな攻撃方法を試みていますが、予算の関係から砲兵の掩護射撃用砲弾が不足していたのも、犠牲者が多く出た原因のようです。御存知のように、優秀だとされた児玉源太郎大将も乃木さんと同じ山口県の宇部藩出身です。

脱線ついでに、もう一冊の本を御紹介します。『「南京事件」の総括』(田中正明著・小学館文庫・平成 19 年 7 月発行)は、東京裁判で突然出てきた、いわゆる『南京大虐殺』が捏造であることが、多くの証言や詳細な記録をもとに書かれた秀作です。御一読をお勧めします。

2 北部仏印進駐に伴う航空運用¹⁾

(1) 進駐前の情勢

昭和 15 年(1940 年)9 月 23 日、日本軍は北部仏印(フランス領インドシナ)のハノイに進駐しました。その目的は、援蒋ルートを遮断して、日華事変を早期に終結させることにありました。

昭和 15 年、ドイツ軍の電撃作戦に席卷されたフランスのペタン政権は、6 月 22 日に降伏しましたが、日本政府はそれより前、フランスに対して「仏印と支那の国境を閉塞し、その状況視察のために軍事専門家を派遣したい」と要求し、6 月 20 日に承認を得ました。しかし、仏印側との交渉は難航し、9 月 4 日になってやっと成立しました。その内容は、ラオカイ、フートー及びヴィンイエンの 3 飛行場の使用と、5 千名の兵員の進駐でした。

(2) 陸軍の勇み足

ところが、仏印側が 9 月 5 日に、「日本陸軍機 9 機編隊が 3 回にわたって越境飛行をし、また、鎮南關の陸軍部隊が侵入した」という理由で、協定を破棄してきました。陸軍の進入は事実であり、大本営・政府は、地上部隊を引き返させますが、他方、交渉決裂の場合は、9 月 23 日零時以降、陸路、24 日以降、海路から自主的進駐を行うことを決定しますから、我が国の態度は強硬でした。

陸海軍の協議を終えた、参謀本部第 1 部長・富永恭次(きょうじ)少将はハノイで、使用飛行場を 5、

警備兵力 2.5 万名を駐留させるというエスカレートした要求をします。日本軍と戦っても勝ち目がない仏印側はやむなく、9月22日にそれを呑みます。

北支・中支に重点配備されていた第3飛行集団(集団長・木下敏中将)は、南支那方面転用を命ぜられ、9月17日に、安藤利吉南支那方面軍司令官の指揮下に入りました。

残念なことに、平和進駐の指示は徹底しませんでした。第5師団(広島の兵)は9月23日零時、鎮南關方面から攻撃を開始し、仏印軍と戦闘を開始しました。

第3飛行集団は方面軍司令官の命令に基づき、「戦闘停止、支那領内への引揚げ」を指示するビラを投下しましたが、第5師団はそのまま、攻撃を続行し、25日、ランソンを占領します。

そのうち、第3飛行集団も、地上部隊の掩護のために爆撃をしたそうですから、なりゆき任せの作戦行動でした。このときに、仏空軍のモランソルニエ戦闘機の数機と遭遇し、それが航空偵察を妨害したため、そのうちの1機を撃墜しました。当然、宣戦布告はしていません。

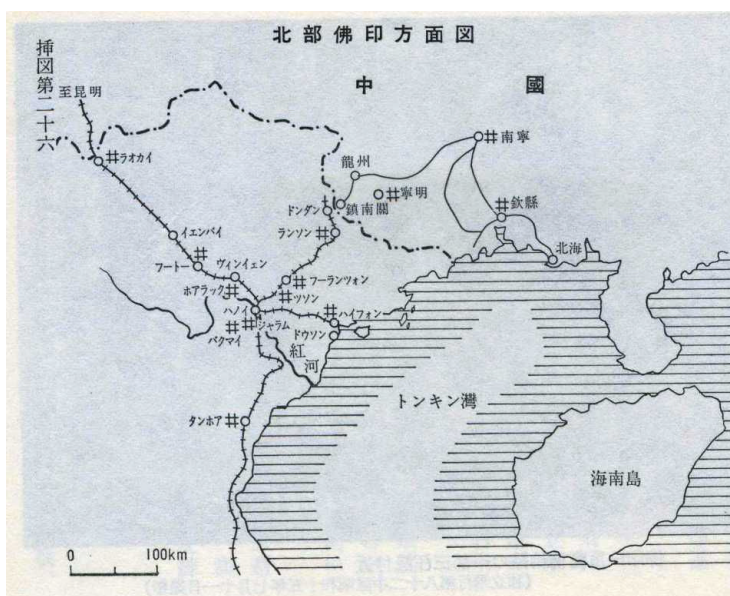
海路においても勇み足がありました。印度支那駐屯軍司令官・西村琢磨少将は、ハイフォンに平和上陸する予定でしたが、鎮南關方面で戦闘があったために仏印側から上陸延期の申し出があるや、それにかかわらず9月26日未明に進攻し、ハイフォンを占領してしまいました。地上戦闘はなかったのですが、軽爆中隊の空中勤務者(中尉)の「対空射撃を受けた」との誤判断により、ハイフォンを爆撃してしまいます。これがのちに問題視されました。

東條陸軍大臣(昭和15年7月22日就任)は、安藤利吉南支那方面軍司令官、当該中尉及び富永恭次少将を更迭しました。参考文献3によりますと、富永少将は、「飛行機は使わない」という協定を破ったことで更迭されましたが、5年後には、第4航空軍司令官として在任中、フィリピンから部下を見捨てて逃亡し、「陸軍航空上層部最大の恥辱」とされた人物だそうです。また、東條陸相は、仏軍に強圧的態度を取って戦闘が起こったとして、岡田重一・作戦課長も更迭しました⁸⁾。

(3) 北部仏印進駐の終局

昭和15年(1940年)9月26日、陸軍は、印度支那駐屯軍及び第21独立飛行隊(戦闘2、偵察1、軽爆1の計4個中隊)等以外の、支那への撤収を命じられ、海軍は、第14航空隊(艦戦、艦爆計約30機)が進駐することで協定がなされ、海軍は10月3日以降、陸軍は10月5日から9日にかけて実行されました。

また、9月27日、松岡洋右・外務大臣が強力に推し進めた、日独伊三国条約が締結され、松岡が企図した、「アメリカ人は、強い態度に出れば引っ込む」という、本人が米留時代に一般市民との付き合いの中で培った信念とは逆に、アメリカから強力な圧迫を受けることとなります。松岡は翌、昭和16年(1941年)4月13日に日ソ中立条約も結び、四カ国でアメリカに対抗しようとしてきました。御承知のように、松岡は、東京裁判中に病死します。



北部仏印方面図¹⁾

3 関東軍特別演習

昭和 16 年(1941 年)6 月 22 日に独ソ戦が勃発すると、関東軍の「満洲防衛戦力に不安がある」という主張に押され、昭和 16 年 7 月 7 日、満洲に大規模の兵力集中を行う、『関東軍特別演習』が下令されました。目標の兵力規模は、16 個師団(うち内地から 2 個師団)、80 個飛行中隊(約 900 機)、合計約 85 万人の戦略展開で、陸軍史上最大の規模でした¹⁰⁾。しかし、当時の極東ソ連軍は、30 個師団、2,800 機と推定され、勝算は容易に見出せませんでした¹⁰⁾。

関特演は、ドイツ軍がソ連軍を弱体化させ、かつ、我の南部仏印進駐に対して米国が動かない場合にソ連を攻撃し、その攻撃行動は、冬が始まる 11 月頃までに終了するという狙いとした戦争準備行動でしたが、結局、ドイツ軍の攻勢作戦が予期のとおりに進展せず、米国は我が国の資産凍結と石油の禁輸処置を発表するに及び、戦争を発動するには至りませんでした。

4 南部仏印進駐に伴う航空運用¹⁾

南部仏印進駐が、アメリカをして対日戦争を決意させたという見方もありますが、それは、アメリカの言い訳だろうと思います。アメリカは、対ドイツにしろ、対北ベトナムにしろ、しばしば開戦のきっかけを作為し、又は相手に作らせてきました。大東亜戦争においてもそうでした。

昭和 15 年(1940 年)暮れに、二人の神父を来日させ、満洲国承認などを含む「日米諒解案」なる民間案を作り上げて、日本に日米和解の希望を持たせたのも、戦争準備のための単なる時間稼ぎだったと思います。その理由は、「支那からの全面撤退」を求めたハル・ノートとの大きな落差などが証明しています。

「その 7」(07.7.4)で述べましたが、平成 19 年 6 月 19 日に行われた、元防衛研究所・主任研究官・永江太郎氏の講話内容を、再び御紹介したいと思います。

1941 年 11 月 7 日の、ヘンリー・スチムソン陸軍長官日記には、「米国が日本を攻撃すると、国民が政府を後援するかどうか、そしてまたそのために、いかなる策を採るべきかと大統領が述べた」とあります。

また、1941 年 11 月 25 日の「PEARL HARBOR ATTACK」という文書(真珠湾査問委員会[JOINT COMMITTEE ON THE INVESTIGATION OF THE PEARL HARBOR ATTACK]の聴聞記録。アメリカ 79 議会に提出された)で、大統領が、「問題は、我々自身が過大な危険にさらされないで、最初の一弾を撃たせるような立場に、日本をいかにして誘導していくべきかということであった。これは困難な仕事である」と言っています。

(1) 南部仏印進駐の必要性

昭和 16 年(1941 年)6 月 22 日、ドイツがソ連に侵攻を開始して、松岡の四カ国連合構想は挫折します。また、ドイツが早期にソ連に勝利するであろうという推測が、日本をして南部仏印進駐の後押しをし、我が国は 7 月にそれを実行しました。

昭和 15 年秋から 16 年春にかけて、米国の屑鉄禁輸、日独伊三国同盟に対する米英の反発、南方における米英豪蘭の軍事的連携の強化に鑑み、日米戦争必至の空気が醸成され、日本は、蘭印に武力進出しなければならないという切迫感が募っていました⁹⁾。

攻略目標は、英領マレー、蘭印及びフィリピンで、その理由は、石油、米、ゴム、錫、亜鉛等の確保にありました。

(2) 南部仏印の航空的戦略価値¹⁾

資源のあるスマトラ、ボルネオ地区は、南支那や北部仏印から 2~3 千キロの位置にあり、弾薬を搭載した陸軍戦闘機の航続距離が 500~600 キロしかないために、途中に何箇所も中継基地を

設ける必要があり、南部仏印に進出せざるを得ませんでした。

極東方面の英軍航空機は、マレーに約 250 機、ビルマ・印度に約 250 機、豪州に約 400 機配置されており、逐次増加されていました。また、蘭軍航空機はスマトラ・ジャワに約 250 ～300 機配置されていると見積もられました。したがって、マレー上陸作戦を成功させるためには、600～700 機収容の航空基地確保が絶対に必要と考えられました。

(3) 南部仏印進駐部隊とその行動¹⁾

昭和 16 年(1941 年)7 月 3 日、大本营は、第 25 軍に対して進駐準備を命じました。同軍は、近衛師団、独立混成第 21 旅団及び航空部隊(第 7 飛行団、第 21 独立飛行隊)等から成りました。

南部仏印進駐においては、北部仏印進駐の教訓を踏まえ、平和進駐か武力進駐かを明確に示し、その区分を変更しないこととされました。

やがて、フランスのヴィシー政府は 7 月 22 日、全面的にこれを受け入れ、7 月 30 日、第 25 軍は平和裏にサイゴン上陸を果たしました。

第 7 飛行団長・山本健児中将は、第 25 軍の航空部隊を統一指揮し、一部で海南島から船団護衛をさせ、自らは、7 月 30 日、24 機を率いてサイゴンに進駐しました。

我が国は、平和進駐をすれば、重大な事態を招くことはないだろうと思っていましたが、アメリカはすでに、諜報活動により私の考え方を知っており、7 月 25 日に在米資産の凍結を発令し(翌日発効)、26 日から 28 日にかけて、英蘭もこれになりました。

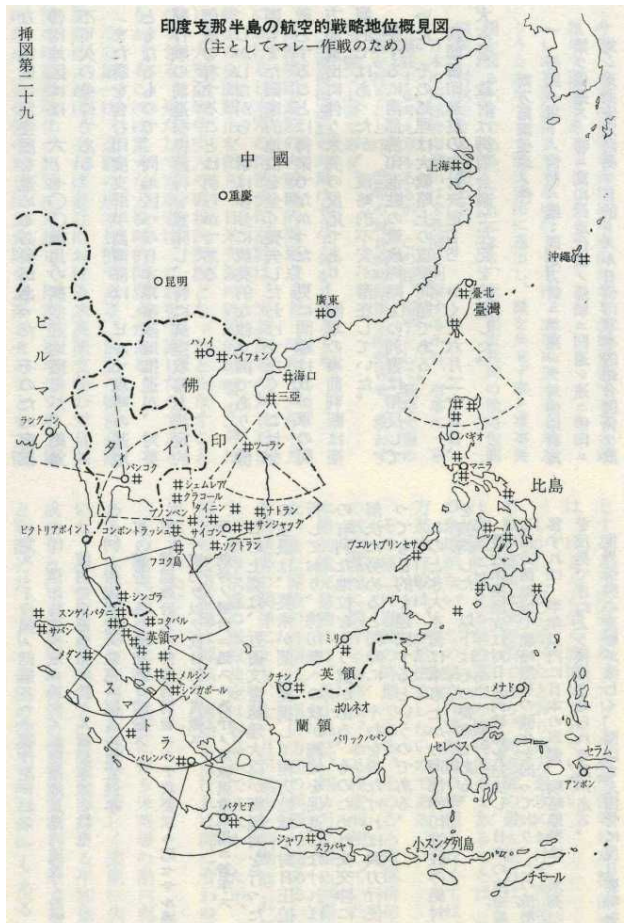
また、アメリカが 8 月 1 日に石油の全面的対日禁輸を発表し、米英可分(英と戦っても米は出てこないだろう)という考えが大勢だった我が国は絶体絶命の立場に追い込まれました。

5 陸軍航空軍備の状況¹⁾

参考文献 1 によりますと、昭和 15 年度末(昭和 16 年 3 月)の飛行中隊数は、次のとおりです。計画上の比率は、爆撃:戦闘:偵察=5:3:2 で、爆撃重視の軍備でした。

	偵察	戦闘	軽爆	重爆	計
満洲	14	24	20	14	72
支那	6	7	7	3	23
内地	3	6	2	3	14
合計	23	37	29	20	109

陸軍機の概数は、満洲 1,100 機、支那 500 機、内地軍隊 400 機、内地航空廠 1,000 機及び学校 2,500 機の合計 5,500 機(うち練習機が 2,500 機)でした。航空廠の機数の多さに驚きますが、それほど消耗が激しかったのでしょう。



印度支那半島の航空的戦略地位概見図¹⁾

参考文献 2 の付録によりますと、陸海軍の生産機数と航空揮発油の生産・消費量は次のようになっています。昭和 18 年(1943 年)と昭和 19 年(1944 年)は、航空揮発油の生産量が消費量を上回っており、また、昭和 15 年(1940 年)度末の備蓄量が(陸海軍の合計だと思えます)、40.5 万 kℓであったという資料がありますので、全体から見れば、燃料不足になることはなかったこととなります。

昭和年		14	15	16	17	18	19	20
飛行機 (機)	陸軍	2,905	3,084	3,560	5,330	8,560	13,876	1,980
	海軍	1,703	1,633	2,545	4,170	8,950	12,899	3,150
	合計	4,608	4,717	6,105	9,500	17,510	26,775	5,130
航空揮発油 (kℓ)	生産量	171,904	192,456	318,066	528,243	874,412	813,224	131,500
	消費量	174,000	204,600	361,500	633,200	836,900	794,440	132,000

6 一式戦闘機「隼」の制式採用⁴⁾

昭和 14 年末、飛行実験隊長を命ぜられた今川一策中佐は、部隊長級の操縦将校や下士官操縦士のうちから優秀な人材を多数呼び寄せ、現用機や試作機のすべてを集めて研究させました。

この中に[キ 43]があり、今川は部下に、「落下式予備燃料タンクを搭載して何時間飛べるか検討せよ」とか、「97 戦と空戦をやって勝つ方法を見つけろ」と命じました。すでに、海軍の零戦が重慶攻撃で大戦果を挙げたことを聞いており、同じ発動機を持ち、大きさも構造も似通った[キ 43]にそれができないはずはないと、今川は確信しました。

また、陸軍の水平面内の空戦ルールではなく、縦面内の空戦に持ち込めば 97 戦に勝てることも発見しました。

やがて昭和 15 年 8 月、参謀本部から呼び出しがあり、「900 km 進攻して空戦し、帰還できる戦闘機を、昭和 16 年 4 月までに、2 個戦隊・約 50 機整備する方策を至急提出せよ」という命令を受けます。陸軍は、友好国タイから離陸してシンガポールを爆撃する際の掩護機を必要としていたのです。

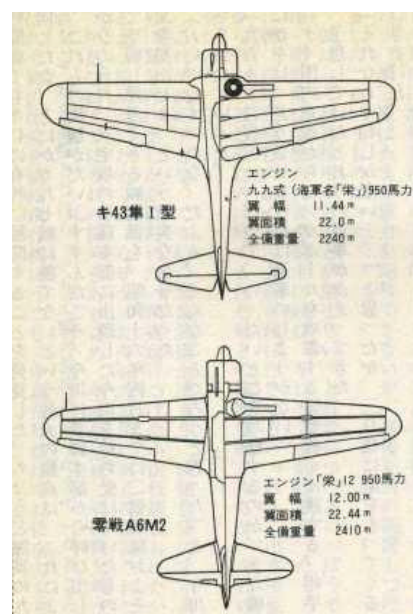
今川は、参謀本部、航空本部及び明野飛行学校の代表者を福生に呼び、97 戦と[キ 43]の模擬空戦をやらせて、その優秀性を見せ付けました。これが決め手となって[キ 43]の採用が決まり、中島飛行機は、撤収していた治具をまた取り出しました。

昭和 16 年に入ると太田工場における生産が急ピッチで進み、4 月までに 50 機を完成して、『一式戦闘機』として制式採用されました。陸軍はのちに『隼』の愛称を付与し、この名称が国民に親しまれますが、海軍の零戦は、先にデビューして活躍していたにもかかわらず、覆面の新鋭戦闘機とされていたため、その存在が広く知られたのは、戦後になってからだそうです。

隼は I 型から III 型まで合計 5,751 機が生産され、旧軍では、零戦の 10,430 機に次ぐ生産機数でした。

零戦の改良ナンバーは、例えば「62 型」ですと、機体が 6 回目、発動機が 2 回目というふうになります。

参考資料 6 によりますと、零戦(試作機 A6M2)、隼(試作機キ 43)及び九七戦改の性能比較は次ページのとおりです。



隼と零戦の形状と諸元⁴⁾



零戦 62 型(中島 82729 号)と榮発動機
(大和ミュージアムにて筆者撮影)

戦闘機の性能比較表⁶⁾

	馬力	高度 (m)	全備 重量 (kg)	翼面 積 (㎡)	翼面荷 重(kg/ ㎡)	馬力荷 重(kg/ 馬力)	速力 (kt)	5千m 上昇時間 (分-秒)	機銃※ (口径× 装備数)
A6M2	950	4,200	2,400	22.4	107	2.5	275	5-55	7.7mm×2 20mm×2
キ-43	1,000	1,000	1,950	22.0	90	1.95	265	5-30	12.7mm×2
九七戦改	800	2,400	1,490	18.5	80	1.85	250	5-40	7.7mm×2

※注: 「その9」(07.9.20)で、陸軍が12.7mm以上を「機関砲」と呼んだということを述べましたが、参考文献7によりますと、海軍は、7.7mmから40mmまでを「機銃」でとっています。ちなみに、米英は、12.7mmまでが「機関銃(machine gun)」、20mm以上が「機関砲(cannon)」、ドイツでは、21mm以上が「機関砲(cannon)」だそうです。

隼は、翼の骨組み構造が20mm機関砲搭載に不適合で、火力の面で零戦に劣り、防弾装備の優れた米英の爆撃機撃墜は困難でした。そこで、[キ 84](四式戦)の生産で忙しくなった中島からバトン・タッチされた立川飛行機が、[キ 43III乙型]を製造して20mm機関砲を搭載しました。しかし、一式戦闘機は、その頃すでに制空戦闘機としての力を失っており、量産はされませんでした。

隼と零戦のどちらが優れていたとは一概には言えません。増槽付きの航続距離が、隼で3,000km、零戦で3,500kmと書かれた資料がありますので、これを信じれば航続距離では零戦優位と言えますが、同等だったという記事もありますので、断定はできません。速力は、わずかに零戦が優位だったようです。ただし、加速性能、上昇性能は隼が優れていました。

隼の長所として確かに言えるのは、零戦には防弾装備がなかったのに対し、I型から燃料タンクを防漏型とし(対7.7mm弾)、II型から対12.7mm弾の防漏型燃料タンクと操縦士用防弾板を装備したことです。のちに零戦に防弾装備が追加され始めてからは、零戦の能力は落ちていきます。

昭和18年頃になると、両機種とも機体剛性上、急降下速度が低く制限されている(零戦650km/h、隼600km/h)ことが相手に知られ、その弱点を突かれて、米英の戦闘機にやられるようになります。

通信装備は、陸軍が日本電気、海軍が日本無線と決まっていた、終戦まで変わらなかったようですが、無線機はほとんど通じないことが多かったようです。

7 昭和16年(1941年)頃に制式化された2種の航空機⁵⁾

○ 中島 二式(単座)戦闘機『鍾馗』[キ 44]

陸軍は、縦面内の戦闘を行うドイツの重戦Bf109に関心を示し、昭和13年(1938年)初頭、[キ 43]の開発着手後直ちに、[キ 44]の名称で、重戦の試作機を発注しました。ただし、陸軍はまだ、軽戦至上主義を捨ててはおらず、あくまで研究用でした。

そして、正式に要求性能が出たのは、昭和14年(1939年)半ばで、それは、最大速度600km/h以上、高度5,000mまでの上昇時間5分以内、行動半径600km、射撃兵装7.7mm銃×2、12.7mm砲×2というものでした。

[キ 27]、[キ 43]と同じ小山技師を長として、試作1号機が完成したのは昭和15年(1940年)8月でした。液冷の千馬力級の



飛行第85戦隊の二式単戦二型甲

[鍾馗二型甲]⁵⁾ 全幅:9.45m、全長:8.90m、全備重量:2,765kg、発動機:中島二式[ハ 109] 1,520HP、最大速度:605km/h、航続距離:1,290km、武装:7.7mm銃×2、12.7mm砲×2、爆弾:200kg、乗員:1名

発動機があれば、機体の前面面積を小さくできて、高速飛行に有利ですが、当時の日本にはありませんでしたので、中島は、自社製の空冷式[ハ 41](1,250HP)を採用しました。

これは、[キ 49](呑龍)に搭載した発動機であり、[キ 44]は、大変頭デッカチの飛行機になりました。速度を出すためには翼面荷重を大きくしなければならず、主翼面積は 15 m² ([キ 43]は 22 m²)と小さくし、翼厚比も 14.5% ([キ 43]は 16%)と小さくしました。糸川英夫技師が考案した蝶型フラップについては、前号で述べたとおりです。

7.7mm 銃×2 は機首上部に設置されましたが、12.7mm 砲×2 は、陸軍戦闘機としては初めて翼内に装備されました。

試作機の数及び上昇性能は芳しくなく、改良によってなんとか最大速度が 580km/h まで出たところで 10 機を生産し、大東亜戦争開始二日目に仏印に投入しましたが、翼面荷重が非常に大きいため(170kg/m²。[キ 43]は 117kg/m²)、よく整備された飛行場でないとい離着陸が困難で、離着陸事故と空襲による損害で、1 機になってしまったそうです。

[キ 44]は、昭和 17 年(1942 年)2 月に『二式(単座)戦闘機』の名称で、制式採用されましたが、足が短いこともあって本土防空用とされ、一型・二型合わせて 1,227 機が生産されたものの、あまり活躍できませんでした。

○ 川崎 二式複座戦闘機『屠龍』[キ 45 改]⁵⁾⁷⁾

参考文献 7 によりますと、1934 年(昭和 9 年)に、フランスとドイツで、双発多座戦闘機構想が芽生えました。

航続距離を増大し、航法士を乗せて正確な航法を行い、武装や爆弾を多く積み、カメラも搭載できるなど、多用途に活用できるというのが、その理由でした。

フランスは、1936 年(昭和 11 年)4 月に三座の『ポテーズ 630』、ドイツは、同年 5 月に二座の『メッサーシュミット Bf110』を初飛行させました。

1937 年(昭和 12 年)、オランダは、重爆撃機の邀撃に主眼を置く、双発二座の『フォッカー G I』を完成させ、のちに三座型も生産します。

これに対しアメリカは、同年 9 月に、五座の巨人戦闘機『ベル XFM-1 エアラキューダ』を飛ばせ、やや遅れて、イギリスは 1939 年(昭和 14 年)7 月に、二座の『ブリストル・ボーファイター』の初飛行を行い、同年、イタリアも『フィアット CR25』を飛ばせます。

結局、1930 年代から 1940 年にかけて行われた、複座戦闘機レースに勝ったのは、アメリカの P-38 だけだったと、参考文献 7 は述べています。単座戦闘機と渡り合え、かつ高速で重武装を備えた複座戦闘機を装備するというのは、やってみると大変なことでした。

双発複座戦闘機については、日本では陸軍が先に目を付け、中島飛行機、川崎造船所(のちの川崎航空機)、三菱重工業の 3 社に研究設計を指示しますが、中島と三菱は、多忙などの理由で辞退し、川崎だけが引き受けました。

昭和 12 年(1937 年)3 月、陸軍はキ 45 の試作番号を与えて、川崎に試作をさせますが、

川崎 二式複座戦闘機『屠龍』[キ45改]⁵⁾(昭和16年)



二式複座戦闘機『キ45改甲』

[キ 45 改丙]⁵⁾ 全幅:15.02m、全長:11.00m、
全備重量:5,500kg、発動機:三菱一式
1,080HP×2、最大速度:540km/h、航続距離:
2,000km、武装:7.9mm 機銃×1、20mm 機
関砲×1、37mm 機関砲×1、爆弾:500kg、乗
員:2名

要求速度 540km/h に対して 480km/h しか出ず、ナセルにストールが発生するなどの問題も発生しました。陸軍は、中島[ハ 20 乙](790HP)×2 を搭載するように命じており、発動機の馬力不足も否めませんでした。しかし、陸軍から[ハ 25](1,050HP)×2 を搭載するように命じられた第 1 次性能向上型の性能も、あまり芳しくありませんでした。

川崎は、第 2 次性能向上型が発注される 2 ヶ月前の昭和 15 年(1940 年)8 月、設計主務者を井町技師から土井技師に代え、独自に設計に着手していました。そしてこの試作機に、[キ 45 改]の試作番号が与えられましたが、これは土井技師が設計して大成功を収めた 99 式双軽爆撃機[キ 48]をひとまわり小さくした形で胴体前半と発動機ナセルを再設計したものであり、[キ 45]とは全く別物でした。

試作 1 号機は昭和 16 年(1941 年)9 月に完成し、最大速度 540km/h、高度 5,000m までの上昇時間 7 分、航続距離 2,000km と、軍の要求値をすべて満たすもので、ドイツから輸入した単発戦闘機 Bf109E との空戦において、ほぼ互角に渡り合ったために、合格となりました。

そして、昭和 17 年(1942 年)2 月、[キ 44]とともに、『二式複座戦闘機』として制式化され、仏印に配置されますが、米英の単座戦闘機よりも機動性が劣るため、爆撃機の護衛としては使えず、もっぱら海上哨戒と船団護衛に使用されました。双発複座機を開発したヨーロッパにおいても、やはり、よい性能が出なかったようです。

それでも、戦線の拡大に応じて需要も増大し、複座戦闘機では後発の海軍で、昭和 18 年(1943 年)5 月、二式陸偵(のちの夜間戦闘機『月光』)が『斜め銃』を武器に、ソロモン諸島上空で大型爆撃機を多数撃墜したため、陸軍は見習って、屠龍にも前席と後席の間に、新型の『ホ五』20mm『上向き砲』を 2 門装備し(二式陸偵は下向きの斜め銃も装備しましたが、ほとんど使われませんでした)、[キ 45 改丁]として生産することとしました。

新型砲『ホ五』の生産が軌道に乗ったのは、昭和 19 年(1944 年)に入ってからでしたが、昭和 19 年 6 月 15 日深夜、支那奥地から北九州の八幡を狙って飛来した B-29 四発重爆に対し、飛行第 4 戦隊(山口県小月飛行場)の屠龍 8 機が、撃墜 6 機、撃破 7 機の大戦果を上げました。

第 53 戦隊(千葉県松戸飛行場)の屠龍も昭和 19 年 11 月以降、大活躍をしましたが、マリアナ諸島が陥落してからは P-51 戦闘機が護衛に付き、しかも、B-29 が我が戦闘機を目視で発見しやすい昼間攻撃に移行したために、屠龍の活躍の場が少なくなりました。

生産機数は、甲から丁までの全型で 1,690 機でした。

おわり

次回は「大東亜戦争開戦前夜」

< 参 考 文 献 >

- 1) 「戦史叢書 陸軍航空の軍備と運用(2)」(昭和 49 年 11 月 防衛庁防衛研修所戦史室)
- 2) 「戦史叢書 陸軍航空の軍備と運用(3)」(昭和 51 年 5 月 防衛庁防衛研修所戦史室)
- 3) 「陸軍航空隊全史」(昭和 62 年 9 月 木俣 滋郎著 榊朝日ソノラマ)
- 4) 「戦闘機「隼」」(平成 7 年 10 月 碓 義朗著 光人社)
- 5) 「日本軍用機事典 陸軍篇」(平成 17 年 9 月 野原 茂著 イカロス出版(株))
- 6) 「零戦(れいせん)」(平成 19 年 10 月 堀越二郎・奥宮正武著 学研文庫)
- 7) 「日本海軍夜間邀撃戦」(平成 17 年 1 月 渡辺洋二著 榊大日本絵画)
- 8) 「東條英樹と天皇の時代」(平成 17 年 11 月 保坂正康著 ちくま文庫)
- 9) 「大東亜戦争の実相」(平成 14 年 6 月 瀬島龍三著 PHP 研究所)
- 10) 「陸軍航空の鎮魂」(昭和 54 年 3 月 航空碑奉賛会)